

時中における道徳性変容のとらえ方

足利市立第二中学校 坂本三郎

I はじめに

道徳は、すぐれて主体的・実践的な性質のことであるらしい。良心の声に耳をかたむけ、良心の命ずるまゝに平生のふるまいができるべき……と思うのであるが、道徳観によるしつこい拘束力をもてあましている自己に気づく毎日である。

しかし教師は、直接間接人間としての望ましい生き方に、表だってたちいる必要がある因果な職業である、とするならば、居直って「道徳の本質は何か」というだいそれた逆襲を考え、模索しはじめた自己に気づき、この機会に最近の実践を発表し、皆様の御指導・御批判を仰ぐことは、私にとって大切なことであると思う。

II テーマについて

1. 道徳性といつても抽象的で、わかっているような、わからないような、部分的な理解は可能であるが、総合してみたり、構造的な見方をするとかすんてしまうような感じがしないでもない。道徳性を分析すると次の6つの因子になるといわれる。

- ① 道徳的安定性
- ② 自我の強さ
- ③ 超自我の強さ
- ④ 自発性
- ⑤ 友好性
- ⑥ 敵意 - 罪悪感

これらの六つの因子が結合し「社会生活の規範としての法則に一致すべき心性としてはたらき、道徳意識と道徳的行動を総合したもの」とみている。

2. 変容については、「ものの容態の変化」という考え方から、社会のいろいろな事象に対して、主体者である生徒自身のものの見方・考え方・感じ方が変化することを指している。この場合の変化は、最近の道徳授業で価値と価値の間の葛藤する教材が増えている現在、道徳的には、善でも悪でも、ものの見方・考え方・感じ方の変化そのものを「変容」と考える。

特に価値の一部をなす欲望やその充足は、本来的には善でも悪でもないはずである。それが反道徳的な行為と結びつくことにより悪とされるのであるが、欲望という情動が昇華されて、より高い価値すら生む場合もある。だから善悪に関係なく、多様化した価値観の中で、生徒が価値を認め、あるいは価値を否定するという変化も道徳性の変容と考える。

3. それらの変化をどのようにとらえるかということであるが、道徳の指導は周知のように、道徳の時間の指導によってすべて終るというものではない。学校教育の全体をとおしての道徳教育のうえにたち、それを補充・深化統合するために道徳の時間による指導がおこなわれるものである。そこでより高い道徳性に組みかえられ、生徒自身のものになってゆく、これらの変容は学校教育

及び道徳の授業という場における面的な広がりと、中学校の生活という時間的な流れの中で、その総合としての道徳性の変容を見ることになる。

しかし総合としての道徳性の変容は、個々の道徳性の量的・質的な変容のうえになりたつものであるから、個々の道徳性の変容を大切にする必要があろう。

このような立場から、授業中における道徳性の変容に焦点をあてて、そのとらえ方について、私案をのべてみることにする。

III 方法について

数年来、足利地区における道徳の授業は、相互に対立あるいは対立を予想させる生徒の発言をかみあわせて、より生産性を高める授業、即ち道徳性をより高度なものへ組みかえてゆくという「話しあいの組織化」が実施されてきた。

それは「中学校道徳自作資料選集3」 井上治郎・今井亀夫編（明治図書）で示されている。作品の解説要領によると、

1. 作品のごくおおまかな筋書きを述べる。
2. 主題構想にあたっての「ねらいとする指導内容」の一例を述べる。
3. 「期待される子供たちの初発の感想」の要点を箇条書きに列挙する。
4. 子供たちに共通にもたらせるべき問題意識を示す。
5. 話しあいの前段における、子供たちへの働きかけの要点を例示する。
6. 話しあいの後段における子供たちへの働きかけの要点を例示する。
7. 必要な場合にかぎってその他の「活用上の留意点」を述べる。とあり、これらを読者がそれぞれの立場で批判的に検討し、取捨してくださることを期待すると結んでいる。ほんとうにみごとというほかはない。「中学校道徳自作資料選集3」を使って、周到に計画し、実施すれば、批判的な検討や取捨するなどできたものではない。

そこで、5・6に焦点をあてて、教師が弁護あるいは批判にてこいれすることによって、または生徒の弁護論や批判論を聞くことによって、生徒のものの見方・考え方・感じ方に変化をきたすとすれば、道徳性の組みかえとなり、道徳性は変容するであろう。

このような方法で道徳授業を展開して気づいたことは

1. 最初から最後まで弁護あるいは批判側で、価値観をかえなかった生徒の、
 - 質的な変化はあったのだろうか。
 - 心の中の価値と価値の間の葛藤はあったのだろうか。
 - 他人の立場に身を置いて考え、感じてくれたことがあったのだろうか。
2. 弁護と批判をくり返すことによって、自己の考え方を時間の流れの中にとらえることができるだろうか。見方や考え方・感じ方の変化は、
 - 一つの意見を聞くことによって、百八十度かわる場合もあるが、
 - 徐々に心にしみこむようにかわる場合もある。
 - 理論的に組み立てて、その総合としてかわる場合もある。

その変化の過程が明確でないと、価値観の変化がほんものではないように考えられる。

3. 話しあいを組織化するためには、発問に対するウェイトが増す、いつ・どこで・どんな発問をしたら、どのような反応がかえってきた、ということを明確にし、改善するための吟味されたよりよい発問を、時間の流れの中で考えてみることができないだろうか。
それによってよりより資料の使い方が可能になってくる。

以上のことからを満足させるために「変容記録カード」を使った授業案を提示する。

IV 道徳学習指導案

1. 主題名 新築(寛容) 第2学年 出典—中学校道徳指導資料3

2. 主題設定の理由

本校は足利市の旧市内中心部に位置しているが、学級数・生徒数共に減少の傾向にあり、学年の学級数は7学級から4年間に6学級となり、現在は6学級の横ばい状態を続けている。
しかしドーナツ現象をおこす前期的症状をきたしているのであろうか、家を新築して、旧市内より新市内へ出て行く生徒が意外と多い。

そのために資料「新築」のようなトラブルがおきる可能性はじゅうぶんにある。

この時にあたり、生徒相互、父母相互の心のつながりをより緊密に保ち、それを継続させるためにこの主題を設定した。

3. 資料の読みとりとねらい

① 資料の読みとり

- 主人公の考え方や行動を生徒の実態にかさねてみると、実態調査から現在の自分の住んでいる家屋についてー自家ー36名
 - ー借家ー 5名
 - ーマンションー 2名
 - ー寮ー 1名

そのうち、中学生になってからの新築2名、今後1年以内に新築を予定しているもの2名、となっている。

- 上記の結果から、身をもって中学時代に新築を体験または体験するだろと思われる者は4名となり、新築を身近かなものと考える生徒は10パーセントを割る。

ただ将来において新築を経験する者は多いであろうし、必然的にトラブルのおこる可能性も多いであろう。

- また、借家住いの者は意外と借家であることを気にしていない、生徒も父兄も心の中では自家の新築を望まれていると思われるのだが、経済的条件のためであろうか。

- 資料を読んで生徒は、友情の発展したものとして近隣のつきあいを考えるために、主人公(相原さん)に味方して、相原さんの弁護にまわるであろう。

しかし身近かな問題として考えない生徒は感情面から、またよく資料を読みとった生徒は、理論的な面から、相原さん批判または中間の立場をとるであろう。

- そのために、この資料での学習は、相原さんの考え方を弁護し、遠藤さんをかわいそうだと生徒に感じさせるまで追求させることにより、「遠藤さんは誰にも迷惑をかけていないのに

なぜ追求されなければならないのか」という考え方が出でることにより、「相原さんの考え方や行為に問題はなかったのか」というところへ発展させることができる。これが資料を生かす基本であろう。

② ねらいの限定

以上のような資料の読みとりから、ねらいを項目5-(1)にかぎって、次のように限定した。

「一時的な感情にとらわれず、他人の立場を思いやり、相互にあたたかく励ましあいながら生きる態度を養う」

4. 主題構想の要点

① 話のしめくくり方

話し合いのおちつけ方は、相原さんの考え方や行動を認めながら、それではすくいがないというやりきれない姿に焦点をあてて、解決のための何かよい方法があるのではないか、という立場でねらいに迫るようにしたい。

② 初発の感想

- 今迄親しく述べていたのに、引越しともなると、前日までかくし続けられたのではおもしろくない、ましてすばんまで頼んでおきながら…………。
- 借家住いの悲哀を慰めあってただけに、相手にうちあけられなかつたのではないか、そのことを考えないで、相手を非難する主人公に問題がある。という感想になると思われる。

③ 共通問題意識

「主人公(相原さん)のもったおもしろくない気持ちについてどう考えるか」

④ 展開の前段

話しあいのしめくくり方からすると、相原さんに対する批判論の裏がわにひそむ弁護論をほりおこして、かばおうとするところから、授業を展開していきたい。

そのためには、今迄親しく述べていた相原さんに対して、真実を語らない遠藤さんの問題点をあらい出して、主人公(相原さん)を弁護しやすいように配慮する。

⑤ 展開の後段

遠藤さんの立場にたって、相原さんの行動について批判されるところはないか、という見方をすることにより、主人公(相原さん)の問題点をあらい出す。

5. 指導過程

教師の働きかけ	予想される生徒の反応	指導上の留意点
1 課題 新築を読んで感想を書かせる。 2 初発の感想を発表させる。	◦ 道徳ノートに整理していく ◦ 略 ◦ 4-(2)に同じ	◦ 発表を予想し、自分のことばで書かせる。 ◦ 友達の発表は良く聞き、メモをとらせる。

3 チェック 0 初発の感想を聞いて、自分の考え方をまとめさせ、変容記録カードに書かせる。	○変容記録カードを記入する。	○すなおな気持ちで、感じたり、考えたりしたまゝをカードに記入させる。
4 共通問題意識 「主人公のもったおもしろくない気持ちについて、どう考えるか」		○弁護的な意見・批判的な意見のどちらの生徒にも共通な問題点として、了解をとりつける。
5 主人公は、今迄親しくつきあっていた遠藤さんに、新築について引越しの前日までかくし続けられたことについて、どう思うか。	○裏ぎられて立腹するのは当然だ。 ○みづくさい。 ○遠藤さんの立場もわかってやるべきだ。	○相原さんに対して弁護的な意見を中心話し合いをすすめる。 ○細かな点にとらわれず、心のゆれを大切にする。 ○遠藤さんに対して、弁護的な意見を中心話し合いをすすめる。
6 チェック 1 7 遠藤さんはなぜ主人公にうちあけることができなかつたのか、その場合の遠藤さんの気持ちをどう思うか。	○主人公に迷惑をかけたくない ○自慢するようでいやだ。	
8 チェック 2 9 相原さんの考え方や行動について、批判されるところはないだろうか。	○遠藤さんの思いやりの心が、わからなかったのではないか ○もっとすなおに新築を祝ってやつたらよい。	○相互に相手に対する理解が、浅かっためんをとらせたい。
10 チェック 3 11 主人公と遠藤さんが、相互に温かく励ましあいながら生きるためにはどうしたらよかったですと思うか。	○主人公のような自分本位の考え方をすべて、相互の立場を理解し、許しあい、温かく励ましあいながら生きる。	
12 チェック 4 13 チェックのまとめ 14 今日の学習で、なにがわかったかノートにまとめさせる。		○要点をつかんだまとめをさせる。

V 変容記録カードについて

1. 解説

- ① Dは弁護側を表わす。
- ② Cは批判側を表わす。
- ③ 0・1・2・3・4・まとめは、チェックポイント。

D	C
1	
2	
3	
4	

まとめ

No.

- ④ Tはノートの横罫に同じ。
- ⑤ N。は出席番号記入欄。

2. 使用方法

授業中のチェック0～まとめ迄の教師側の発問に、反応するカードである。

- ①主人公の考え方や行動について、その気持ちがわかる生徒はD側に○印をつける。
- ②主人公の考え方や行動は、おかどちがいであり批判されるべきであると考える生徒はC側に○印をつける。
- ③どちらとも言えないと考える生徒は、中間に○印をつける。
- ④チェックポイント0は、視点を指定した場合の、生徒の感想より○印をつける。
- ⑤チェックポイント1～4までは、主発問に対する反応を記録する。
- ⑥チェックポイントのまとめは、その主題を総合して反応を記録する。
- ⑦Tは、ノートの横罫に発問の要旨や、○印をつけた理由を記入する。
- ⑧授業が終る時点で○印を線で結び、自己のプロフィールをつくり、見方・考え方・感じ方の変化を、発問や理由との関連でみる。

VI 新築に関する変容記録カードについて

1. 集計 (下表)

	D	中	C
0			
人数	13名	11名	10名
第1発問			
人数	29名	10名	5名
変化	{ D→21名 中→6名 C→2名	D→2名 中→4名 C→4名	中→1名 C→4名
第2発問			
人数	17名	20名	7名
変化	{	D→12名 中→2名	
第3発問			
人数	10名	16名	18名
変化	{	D→5名 中→9名	D→2名
第4発問			
人数	10名	13名	21名
変化			中→3名
まとめ			
人数	10名	13名	21名

2 考察

① 変容記録カードの利点

- 生徒が弁護側の意見を持っているか、批判側の意見を持っているかということが、机間巡回によって簡単にわかる。
- 主要発問と生徒の反応が、すっきりしたかたちで並べられ、同じ題材に対して、今後の主要発問の改善が考えられる。
- 生徒の感想が記入されているので、反応に対する理由や、見方・考え方がはっきりする。
- 生徒の見方・考え方の動きが、プロフィールのかたちで残り、生徒自身の考え方が何によって変化したかということがわかる。
- 生徒がまとめを書くばあい、考え方のすじ道がはっきりしていて書きやすい。
- 教師側で集計したり、傾向をつかむのに便利である。

②変容記録カードの不利な点

- 生徒が自分考え方を、3つのどれかにあてはめなければならない。
- 展開のパターンがきまってしまう。
- 複雑な要素を同時にとり入れられない。

③資料について

- 予想に反して「新築」に関する興味・関心はうすかった。
- 主人公を相原さんにおいて考える場合と、遠藤さんにおいて考える場合の頭の切りかえができない生徒がいた。
特に相原さん弁護は遠藤さん批判となり、相原さん批判は遠藤さん弁護となるという、複雑な裏腹の関係を持つ主題の、変容カード利用は不適であると思われる。
- 展開方法に問題点があったのであろうか、Dの7名・Cの4名は、最初から最後まで変化しなかった。
生徒の「新築」に対する先入観か、資料そのものに原因があり、変化が見られなかつたのであろう。

④発問について

- 発問0について、中の11名は、相原さん弁護と遠藤さん弁護の両者を含んだ生徒と、考え方で迷いのある生徒が○印をつけたと思われるが、自分の感想によって価値を比較し、価値の高い方へ○印をつけることを希望していたために、中の人数が多かったことは不満である。
- 第1発問の相原さん弁護の結果は、移動が多く見られ意図したことが成功したと思われる。
- 発問は、生徒の反応をみちびき出すものであるが、その反応のフィルターをとおして、次の発問の反応を強化するか、浮きぼりにするかのどちらかあるとすれば、教師側の意図した方向に多くの人数を動かす必要があったであろう。
- 主要発問は、一般的に表現がかたくなってしまうので、補助発問の必要性を感じた。

VII 今後の課題

1. 最初から最後まで、C・Dの中で変化をしなかった生徒の変容は、どのようにしてとらえることができるか。
2. 限定された選択のわくの中で、個々の意見をどうしたら多くみとることができるか。
3. 人間の心の変容を対象とした道徳指導の中で、からみあう複雑な要素をどのように集約し、表現していったらよいか。

この課題を解決することが「変容記録カード」の改善につながると思われる。

新学習指導要領では、道徳性変容に関する「評価」ということばが使われてないが、従来通りこの重要性は変わらないばかりか、今後とも更に研究を要する分野である。このように、「評価」は極めて重要であるにもかかわらず、研究の困難さもあって、その進展も遅々としているのが現状である。こうした中で、「変容記録カード」を用いて、この問題に真正面から取り組んでいることに敬意を表したい。

「変容記録カード」を批判・中間・弁護の3段階でなく、「どちらかといえば批判」「どちらかといえば弁護」も入れて、5段階にすると、生徒の変容を細かくは握できるのではないか。さらに、心情教材を使用するとき、感動の度合等感情の動きをプロフィールでとることも面白いと思う。